令和5年度(2023年度) 学校評価総括表　【伊丹市立緑丘小学校】

教育目標	人間性豊かな、たくましく生きるみどりの子の育成
重点目標	①「確かな学力」を育むために　②「豊かな心」を育むために　③「健やかな体」を育むために　④安全で安心な学校づくり、環境整備　⑤開かれた学校づくり ⑥教職員の働き方改革について　⑦「生徒指導体制」づくりのために

主要施策	施策目標 基本施策		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	①・思考力・判断力・表現力の育成を図り達成感を味わい粘り強く学習できる力の育成 ・共に学び合う楽しさを感じさせる授業による学習意欲の向上 ・読書活動の充実 ②・基礎・基本の確実な定着により自ら学ぶ意欲の向上 ・どの児童もわかる授業の創造 ③家庭学習の充実	①・課題解決のために、対話の中で思考方法や表現方法を意識させる。 ・他者との対話を通して得られた考えをもとに、自分の考えを深めたり、広げたりする。 ・朝読書と図書の時間を週1回設け、読んだ本は読書記録カードに記録する。 ・読書数に応じて、読書の木への掲示・読書カードへのシール貼り・もう一冊貸出券の配布を行う。 ・図書委員による読書の啓発を行う。 ・月々の図書貸出数が上位の児童を表彰する。 ②・ミニプリントの活用・少人数授業を実施し、基礎・基本の定着、学力の向上を図る。 ・課題を工夫したり、具体物を操作したり、表現方法を工夫したりする活動を取り入れる。 ③1・2年生は30分、3・4年生は60分、5・6年生は90分を目標とした家庭学習に取り組む。	①・学年に応じた思考の方法を示す。話し合う目的や視点を明確にする。 ・理由・根拠を明確にして、自分の考えを相手に伝えようとする。 ・読書活動を充実させ、学校図書館開館期間中一人あたりの月平均貸出冊数が7冊を超えることをめざす。 ②・国語力の向上をめざし、「ことばの学習」の時間（3～6年生）を年間35時間実施する。 ・わかる授業づくりを工夫し、児童アンケートにおいて「授業は、わかりやすく楽しいですか。」の回答が90%以上をめざす。 ③児童アンケートにおいて、学年目標を達成した児童が80%以上になる。	B	①・話し合う目的や視点を明確にして話し合いをさせることができた。 ・学年に応じた思考の方法を明確に示すことができた。 ・児童学習アンケート「理由をはっきりさせて、自分の考えを伝えることができる。」の回答が、1～4年が83%、5・6年が76%で、昨年度（1・2年88%、3・4年86%、5・6年87%）よりも下がっている。 ・児童アンケートでは、「朝の読書タイムや図書の時間にすすんで本を読もうとしていますか」の回答が、78.5%と、昨年より5%減少している。しかし、一人あたりの月平均貸出冊数は8冊と目標を上回り、昨年の6.8冊に比べ大幅に増えた。読書の木や読書カードへのシール貼り、もう一冊貸出券や表彰、読書週間などの取り組みの成果であり、決められた時間以外にも本を読んでいる子が増えたと言える。 ②・ミニプリントや復習プリントを活用し、基礎・基本の力をつけることができた。タブレットでの課題を活用し、児童の実態に応じて取り組ませることができた。 ・児童アンケート「授業はわかりやすく楽しい」の回答が90．5%で、昨年度より評価が上がり、90%以上は達成できた。 ③・学年目標を達成できた割合は、74.8%であった。学習塾や家庭教師、インターネットを活用しての学習なども含めれば、目標時間を達成している児童は増えるのではないかと思われる。	①・低・中・高学年の系統的な思考の方法をさらに活用できるように研究していく。 ・引き続き、児童の実態を把握し、対話を通して学びを深めるための手立てを研究していく。 ・理由・根拠を明確にして、考えをもたせる指導を進める。 ・朝の読書の時間をしっかりとるよう、担任の先生方に啓発をする。また、読書まつりのような図書委員の企画を工夫して、読書に興味をもってもらう機会を増やす。 ②・引き続き、ミニプリントや復習プリントの活用・少人数授業を実施する。タブレットでの課題にも継続して取り組ませる。 ・引き続き、児童の実態を把握し、楽しみながら学ぶことのできる課題の工夫など、授業づくりの方法を研究していく。 ③・タブレットを活用しての学習課題が増えていくであろうから、家庭における学習場面の多様化を図り、家庭学習を充実させていきたい。	・最近の若者は、本を読まない人が多いように思う。小学生から読書の楽しさ、大切さを学ばせるのは大切なことだと思う。 ・「授業はわかりやすく楽しい」という児童が90%以上いるのはすばらしい。 ・家庭学習は、各学年決められた時間をクリアしている児童が74.8%いるが、塾等の時間も含めた割合を出すことができればよい。
		新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	①情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度の育成 ②英語学習に対する興味関心や意欲向上 ③授業や学校の運営に関して、ICT活用の推進	①学年に応じた情報活用能力の目標を設定することにより、児童自身が到達度を自己評価することで、情報モラルや適切な活用を意識させる。 ②専科教員・ALT・JTEを活用し、コミュニケーションを取り入れた内容などを積極的に行う。また、書く内容も取り入れ英語力の向上を図る。 ③ICT機器の活用を取り入れたわかる授業の創造や、タブレット端末の活用した学習支援の充実を図る。	①学年に応じた児童の情報活用能力のチェックリストを作製し、目標の達成度や課題を確認することができる。 ②会話を取り入れた活動や、デジタル教材・ICTを活用することで、楽しんで意欲的に取り組むことができるようになる。 ③学習支援アプリやAIドリルを活用し、オンラインの学習にも意欲的に取り組むことができようになる。	B	①情報活用能力のチェックリストに基づき、タイピング能力向上を目的とした「タイピング週間」を実施した。 ②専科教員・ALT・JTEを活用し、学年ごとに、実態に応じた内容を取り入れた学習を行うことができた。高学年に関しては、既習事項を使ってコミュニケーションを取っていければと感じる。 ③部会において、タブレット端末を活用して、提案できるようになったことで、部会準備時間が短縮できた。職員に対して、学習支援アプリ活用方法やモラル教育の研修を実施することができた。	①児童の実態に合わせて、チェックリストの更新を行っていく。プログラミングやモラル教育を計画的に進めていく。 ②ICTを活用し、既習事項を復習できるような課題の配布を行い、学習の定着を図る。 ③ICTを活用した効率化をその都度図っていく。職員に対して、プログラミングやモラル教育の研修を計画的に進めていく。	・子どもは大人以上にタブレットを駆使し、学習に活用している。パワーポイントを使って、資料を作成していることに驚いた。 ・タブレット端末が故障した時のメインテナンスを万全にしてほしい。

学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	①・命を大切にし、思いやりに満ちた子の育成 ・基本的生活習慣の定着（生活指導の充実） ②・いじめへの対応 ・児童の問題行動への対応 ③不登校児童への支援体制の確立 ④校外学習などを通して、さまざまな体験や集団活動などの実施	①・道徳や人権の授業等を通じて、命やお互いを大切にし相手を思いやることのできる子どもの育成を行う。 ・みどりっ子のきまりや月別生活目標、緑小しぐさ「あろは」の推進を図る。 ②・年に2回、アンケート調査を実施し、教育相談を行う期間を設け、実態調査を行う。 ・事例に応じ、職員全体で共通理解し、対応する。 ③別室と不登校支援員を配置し、不登校児童に対応できるようにする。また、不登校児童へ担任からや支援員からのアプローチと幅を広げることによって、児童にとっても話しやすい環境を設定する。 ④感染拡大防止に留意しながら、児童の発達段階に応じたさまざまな経験や集団活動を通して、望ましい体験をすることができるように計画・実施する。	①・道徳、人権の授業後の感想で、自分を大切にしたり、相手の心情を考えたりする気持ちの深まりが見られる。 ・きまりを守り、児童アンケートにおいて、「月別生活を目標を守って生活できている。」と回答した割合が80%以上になる。 ・緑小しぐさ「あろは」を意識して行動し、安全に生活できるようになる。 ②・学年で児童の実態を共有し、今後の対応を検討する機会を大切にする。 ・児童の実態を話し合う場を月１回以上設定する。 ③不登校支援員を実態に合わせて、適切に配置し、児童にとって過ごしやすい環境を整える。 ④普段とは違う生活環境の中で、春と秋の社会見学などで、文化や自然に親しみ、公衆道徳や望ましい集団活動を経験することができる。	B	①・児童アンケートの「自分のクラスはお互いの良いところやがんばっているところを認めあうことができていますか。」については、89.6%と高い結果になっている。しかし、「自分には良いところがあると思いますか。」の結果は、77.8%と他の項目に比べても低い結果となっている。そのため、自尊感情を高める教育活動の推進を今後も行う必要がある。 ・児童アンケートの結果は、85.2%で当初の達成目標はクリアし、昨年度同様の結果が得られた。職員への周知も徹底することで意識して取り組む児童が多く見られた。一方、「あろは」を月別目標に組み入れたが、今一度今後の取り組みの改善が求められる。 ②昨年度に引き続き、「初期対応　その日のうちに報・連・相」の合い言葉をもとに対応することができた。だんだんと定着しており、早め早めの対応ができるようになり、場合によって、ミニケース会議を実施することで組織的に対応することができた。 ③昨年度に引き続き、別室を活用して、不登校支援にあたった。別室を活用することで、教室以外に登校する場所、またはリラックスできる場所が担保され、登校する日が増えた児童も見られた。一方で、別室が当該児童にとって適切なのか、保護者や本人にどのタイミングで提案するかについて、難しさを感じている職員もいるため、より組織的に対応していく必要がある。 ④5月の制限解除以降は、実施場所・バス内での座席間隔・行った先での対策など配慮する点がかなり軽減された。各学年での計画・実施でも児童の活動に負担を強いることなく、実施ができ、子ども達も十分な経験ができ、楽しめたと思われる。ただ、10月からの料金改定により、予算面での苦慮が予想され、来年度以降の計画に影響がある。	①・自己肯定感、自己有用感を高める教育活動の推進を引き続き行っていく。 ・どうとくノート等を活用し、道徳教育の必要性を保護者に啓発するとともに、学校と家庭の協力体制を進めていく。 ・教師自身も、リフレーミング練習（肯定的な言葉かけ）をしていき、児童の見本となるように心がける。 ・昨年度の反省から月別目標に「あ・ろ・は」を多く組み入れ、さらに職員が意識できるように働きかけることが必要である。 ②毎月行っている相談部の定例会での児童の様子の情報交換を今後も継続していく。また、必要に応じて、ミニケース会議についても子どもへの関わり、事案への対応を検討していく。 ③別室の実態を全職員に周知し、どのような場所なのかを知ってもらい、より活用できるように、環境整備に取り組んでいく。 ④予算面での影響を考え、各学年で、実施場所や実施内容などの計画段階での再確認をする。	・不登校児童への関わりは、今後ますます重要になってくる。現在の取り組みを引き続き継続し、不登校ゼロをめざして欲しい。 ・学校長の判断により可能な、子どもたちの思い出づくりは評価できる。 （6年生の広島への社会見学等）
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力あるクラブ活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	①健康な体づくり・体力向上 ②同好の友だちとの自発的な活動を通した、自分の趣味や特技のスキル向上 ③望ましい食習慣の推進	①・健康な状態で活動できるように、健康観察を行うとともに、健康を意識して生活できるように「ほけんだより」を用いた保健指導や、児童保健委員会による、保健広報活動を行う。 ・業間休みに多くの児童が外に出られるように、体育委員会を通じて、遊びの企画を行う。 ②・年5回、5、6年生を対象に行う。 ・自ら目標や内容を決める。 ③栄養教諭による「食の指導」を実施する。さらに、給食センターから送付される食に関する掲示物を掲示する。 食育だより（一言コメント）を掲示するなどして、活用する。 給食委員会による全校生への広報活動を行う。	①・健康観察を毎日1回行う。 ・「ほけんだより」を用いて、保健指導を月1回実施する。 ・児童保健委員会で年に2回以上、健康な生活についての広報活動をする。 ・「休み時間、外で遊ぶ」とアンケートに答える児童が80%になる。 ②目標に向け、活動を積極的に行う。 ③季節の食材を知ったり、栄養について考えたりする。	B	①職員のアンケートより健康観察と保健だよりによる保健指導は90%以上ができたと回答している。児童保健委員会による、児童集会での発表後、来室前に傷口を洗ってくる児童が増えた。児童アンケートで低学年は「よく手洗いをしていますか」については低学年が94%であるが、高学年が86%である。3学期に保健委員会で手洗いの取り組みを計画した。 委員会企画などがある時期は、ドッジボールや長縄練習など、クラスで外に出て運動する姿が多く見られた。しかし、アンケート結果は74%と目標まで足りなかったので、引き続き工夫が必要である。 ②それぞれのクラブで目標に向けて、積極的に活動に取り組むことができた。 ③栄養教諭による「食の指導」を実施した。さらに、給食センターから送付される食に関する掲示物を、2階渡り廊下に掲示した。 委員会の活動では、一言コメントの内容をポスターにした。各フロアの掲示板に掲示し、啓発した。また、食器の返し方や運び方を呼びかけるために立ち当番を行った。 放送委員に協力してもらったり、栄養教諭に来校してもらったりして、食育放送を行った。	①引き続き、健康観察や保健だよりを用いた保健指導を行っていく。感染対策としておこなってきた手洗いの意識が薄れつつあるため、来年度は手洗いについて重点を置いた保健指導を計画したい。 企画を行う時期が他の行事と重なってしまったので、外に出るきっかけ作り（企画）を、1年通して計画的に進めていきたい。 ②引き続き、子どもたちから行いたいクラブ活動のアンケートをとり、自発的に活動できるクラブ活動の実施を行う。 ③季節の食材や栄養、給食に興味をもってもらえるように、給食委員会を中心に全校生に引き続き伝えていきたい。	・長なわを通して、クラスの繋がりや絆が芽生えているのがよい。記録だけではない教育敵効果がある。

学校教育	<u>教育相談・支援体制の充実</u> ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	①自分らしさを発揮し、自ら学び、考え、行動できる児童の育成 ②児童・保護者の困り感に早期に寄り添うことのできるSC・SSW ③支援の必要な児童のニーズの把握、個に応じた学びの場や合理的配慮の提供	①・キャリア教育で目指す4つの資質能力についての系統性を明確にする。 ・各学年の教科などの年間計画に4つの資質能力について書き入れ、どの単元でどの能力の育成を目指すかを明確にする。 ・キャリアパスポートを活用し、振り返り、自己評価をすることで、新たな学習意欲を高めたり、将来の生き方を考えたりさせる。 ・キャリア教育が目指す4つの観点について児童自身の振り返りの場として、アンケートを行う。 ②担任と保護者の面談等で、保護者のニーズを把握した上でSC・SSWへの相談を提案する。 ③・職員に相談機関を周知する。 ・保護者との連携を大切にして、必要に応じて面談を積極的に行う。 ・児童理解のための情報共有を行い、支援について検討し、校内の体制を整える。 ・特別支援教育支援員を配置し、一斉授業の中で個別のサポートを行う。 ・小中連携を行い、就学相談を行う。 ・必要に応じて、個別指導計画を作成し、児童の実態を引き継ぐ。 ・必要に応じて、総合教育センターと連携する。	① 人間関係形成、社会形成能力・自己理解、自己管理能力・課題対応能力、キャリアプランニング能力の4つの重点的な資質能力について、各学年に応じた姿が見られる。（例） ・他者との関わりや自己理解について、教科や行事を通して学び、他者と協力して何かを行ったり、自分の良さについて知ったりすることができる。 ・自分の仕事に責任を持ちやり遂げようとする姿勢や課題を自分の力で解決しようとする姿勢を身につけたり、働くことの意味について考えたりすることができる。 ②職員会議で「児童の様子」を報告する際、関係機関との進捗状況を具体的に共有し、担任が早期に児童や保護者の困り感への対応方法を知る機会とする。 ③支援が必要な児童の実態の情報を校内で共有し、支援体制を整え、引き継ぐことで、児童の支援を充実させる。	B	「自分の周りの人に感謝することができていますか。」「友だちと協力しあって活動することができていますか」といった人間関係形成・社会形成能力に関しては、各学年とも自己評価が高い傾向にあったが、「自分の良いところを見つけることができていますか」「やったらいけないことは、自分でストップをかけることができていますか」といった自己理解、自己管理能力に関しては中学年、高学年ともに低い傾向にあった。このため、来年度以降、自己肯定感を高め、自己理解、自己管理能力を伸ばしていくことが近々の課題である。 ②生指担当が、「ミニケース会議を開く目安」を提示したことにより、ミニケース会議が開かれる回数が大幅に増えた。ミニケース会議では、児童・保護者の実態に応じた関係機関につなぐ手立てを検討し、終礼ファイルでほうこくするなど、組織的な対応ができた。課題としては、ミニケース会議の目安に達しているにもかかわらず、ミニケース会議の開催を検討されていない事例があることである。 ③年度初めに、職員に相談できる機関、流れなどを周知することによって、保護者からの相談に的確に答えることができた。 保護者からの相談・教師の気づきから、巡回相談にかかり、児童に合った学習方法・学習環境などを校内で整えることができた。 個別指導計画を作成し、次学年・進路先に　引き継ぎを行った。	学級活動や道徳などの教材や活動を見直し、自己理解、自己管理能力を伸ばす学習を取り入れていく。　人間関係形成・社会形成能力は自己評価が高いので、他者との良いところ見つけなどを取り入れ、他者から自分の良いところを教えてもらうなどの活動を通して、自分の良さに目を向けさせる。また、教師も、児童一人ひとりの良さを見つけ、伝えていくことで自己理解を深めさせる。 ②「ミニケース会議を開く目安」に達しているにもかかわらず、「開催の検討がなされなかったのはなぜか」この課題から目をそらさず、検討を続け、組織的な対応ができる大切作りを行う。 ③引き続き、支援の流れや関係機関への情報を職員全体に共有できるように、研修に努めたい。 引き続き、児童一人一人に目を配り、児童の困り感に気づき、個に応じた学びの場を提供できるように校内の体制を整える。 ・引き続き、個別指導計画を作成し、保護者や進学先と面談を通して児童の実態を伝えていく。	・生活面で心配な児童が出てきたときに、地域の支援を交えて、支えていく体制ができていけばよい。
	<u>特別支援教育の推進</u> ①伊丹特別支援学校との連携 ②特別支援教育の充実	①支援の必要な児童のための指導内容・支援方法の相談 ②共に生き、共に学ぶことを通した、違いを認め合う学級、学校の実現	①支援の必要な児童の困り感・手立て等を伊丹特別支援学校のコンサルテーションを通して学ぶ。 ②・交流学級を学校生活の基盤とする。 ・交流学級担任と特別支援学級担任が、連絡を密にし、意思疎通を図る。 ・特別支援学級では、交流学級や地域での生活を豊かにすることができるように指導する。 ・子どもや保護者の願いを受けとめ、指導・支援する。 ・特別支援学級の子どもたちの理解を図るために、研修会を行う。	①支援が必要な子を含めて、すべての児童が学び合えるユニバーサルデザインの授業作りを考える。 ②すべての児童が、安心して過ごすことができる学級を目指す。	B	①コンサルテーションを受け、授業の中でできる支援方法について学ぶことができた。教えてもらったことを学校全体に周知することで、コンサルテーションを受けていない学級も学ぶことができた。また、特別支援学級の研究授業にも伊丹特別支援学校のコンサルテーションを利用し、専門的な視点で授業を改善していくことができた。 ②特別支援学級の参観や研修会を行い、特別支援学級の子どもたちについて理解を深めることができた。研修会以外の場でも、安全配慮が必要な児童について、共通理解を図ることができた。また、交流学級担任と特別支援学級担任が、日ごろから、連絡を密にし、意思疎通を図ることができた。	①引き続き、専門的な視点から意見をもらい、きめ細やかな支援の方法を考えていく。 ②今後も、保護者と連携を図りながら、すべての児童が、安心して過ごすことができる学級を目指していく。	・個々の子どもたちへの支援は、継続してお願いしたい。
	<u>教職員の資質向上</u> ①研修等の充実	①授業力の向上と授業改善を目指した授業公開の実施	①『すすんで考え、表現する子をめざして～対話を通して、思考力・表現力を高める指導の工夫～』について職員で研究を深め、授業力の向上と授業改善を目指した授業公開を実施する。	①校内研究授業・事後研究会を年間7回行い、スキルアップ研修会（年間6回）、授業コンサルティングを実施し、授業力の向上を図る。		①・校内研究授業・事後研究会・授業公開、スキルアップ研修会を予定通り実施することができた。研究テーマの共通理解を図り、研究に取り組むことができた。	①引き続き、児童の実態を把握し、楽しみながら学ぶことのできる課題の工夫など、授業づくりの方法を研究していく。	・授業研究を積極的に行うことのできる教職員であり続けてほしい。

教育環境の整備・充実	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	①学校運営協議会の活動の充実 ②学校情報の積極的な発信	①学校運営協議会と教職員とのつながりを深める。 ②学校だより、学年だよりを月1回以上発行する。 ・学校ホームページを月10回以上更新することによって、学校情報を積極的に発信する。	①夏季職員研修に、学校運営協議会委員との交流会を設け、具体的な学校支援について協議し、実施につなげる。 ②保護者アンケートにおいて「学校だより・学年だより・学校ホームページなどにより、学校の様子を知ることができる」と回答した割合が90%以上になる。	B	①・教員と学校運営協議会委員との合同で夏季研修会を開催した。学校の懸案事項について情報共有するとともに、教員が抱えている現場の課題や悩み等を交流し、学校運営協議会として可能な支援について協議した。 ②・保護者アンケートの結果、98.4%もの高い評価を得た。学校情報を写真等の画像を多く用いながら毎日発信し続けているので、学校ホームページのアクセス数は、市内17小学校でトップを続けることができた。	①今後も年間計画に交流の場を位置づけ、学校運営協議会と教職員とが一体となって学校運営を押し進めていける体制を整えていく。 ②引き続き、日々の学校の最新情報を発信し、開かれた学校・保護者や地域とともにある学校をめざしていきたい。	・教員は教育に専念し、学校運営協議会がその他の雑務を担う支援体制ができればよい。 ・学校運営協議会委員と教員との交流は、市内の手本となっている。引き続き、保護者や地域から、顔の見える先生であってほしい。 ・学校ホームページの閲覧数が、市内トップであることは、学校からの情報提供が頻繁に行われているということである。
	安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	①防災、安全教育の充実 ②登校指導の実施 ③交通ルールの説明、自転車交通安全教室の実施 ④安全・安心な学校作り ⑤教師としてのやりがいを大切にした業務改善の実施	①火災、防犯、地震の避難訓練を学期に1回実施し、事後指導で、身の守り方を再度確認する。 ②月1回、校区の危険箇所に立ち児童の登校している様子を確認する。 ③警察の方に、交通ルールのことや、自転車の乗り方など指導してもらい、長期休み前などに、再度学級でも指導する。 ④安全点検を月1回実施し、学校施設や設備の安全・美化に努める。 ⑤夏季研修で業務改善にかかる研修をワークショップ型で実施する。	①さまざま場面の避難訓練を計画することで、児童がより迅速かつ安全に避難でき、身の守り方について学ぶことができる。 ②危険な場所や、登校の仕方で気になることはすぐに対応し、全児童にも指導することができる。安全に登校する児童が増える。 ③交通ルールや自転車のルールを守る児童が増える。 ④安全点検をもとに、安全に過ごす環境を整えることで、問題のある場所がなくなる。 ⑤職員の発案による業務改善を組織的に行い実現する。	B	①今年度は、火災、防犯、地震の避難訓練を行った。避難経路や避難の仕方、身の守り方について考えることができた。 保護者アンケートでは「ご家庭では防災や防犯について話をしていますか。」の項目で肯定的な回答が78.1%だったので、保護者への啓発も必要である。 ②安全に登校する児童は増えている。車や自転車が多く通る場所や信号がない場所などが校区にはあるので見守りが必要なところが多い。今後も指導していく必要がある。 ③長期の休み前に学級指導で交通ルールなどの指導をすることで、児童への啓発ができた。 ④安全点検の結果、学校施設の安全・美化に努め、不良箇所の改善や報告を行うことができた。 ⑤【教師としてのやりがい】を語り合った上で、業務改善のアイディアを出し合うことができた。課題としては、アイディアを出した職員が提案に携わっていくこと。	①児童がいざというときに自分で身を守れるように、避難訓練の仕方や形態について、見直し、改善を行っていく。子どもや保護者にも防災の意識を持ってもらえるように、毎年ランドセルに避難場所などが書かれたカードを入れるようにしていく。 ②危険な箇所などは、すぐに見に行き、児童にすぐ指導を入れるようにする。 ③引き続き指導と啓発をしていく。 ④引き続き学校施設の安全・美化に努め、不良箇所の改善や報告を行っていく。 ⑤業務改善のアイディアを、担当者に丸投げするのではなく、アイディア発案者と担当者が一緒になって【提案書】まで作成すること。	・防災に関しては、保護者を巻き込むようにしていくことが大切である。それにより、児童も関心を高めていくことに繋がる。 ・災害時の体験（阪神淡路大震災をはじめとする様々な災害）を、大人から子どもへ、しっかりと引き継いでいくことが大切である。 ・旧ミノルタ跡の物流倉庫建設にあたり、完成後の登下校の安全のためのガードマン配置を、確実に実行してもらいたい。

学校関係者評価総括

・管理職の先生が、積極的に地域と関わって下さっていることもあり、教職員も「みどりクリーン大作戦」や「わくわくカーニバル」等に、積極的に協力参加して下さる方々が増えてきた。この協力体制により、より素晴らしい学校となる礎が築けてきていると思う。
・全ての総合評価がBであるところが、現状に未だ満足していない、伸び代があるという意味であり、望ましい評価である。

次年度に向けた重点的な改善点

・管理職が交替となる次年度、次期管理職がいかに地域との交流に重点を置いていただけるかで、方向性が大きく変わると思われる。
・現在の、学校と地域との厚い信頼と協力体制を、引き続き継続していくことを願う。

自己評価の基準　A：目標を上回った　B：目標どおりに達成できた　C：目標をやや下回った　D：目標を大きく下回った